

東南アジアにおける生薬の比較研究

(第IV報)

—— シンガポールの中薬 (4)[†] ——

新 田 あ や*

A Comparative Study of Crude Drugs in Southeast Asia, Part IV

——Chinese Crude Drugs in Singapore (4)——

by

Aya NITTA

I は じ め に

前報までに、シンガポールの中薬、621品目の基原について述べ、かつシンガポールの中薬群と葯材学(1961)記載の中薬群、および Gardens' Bulletin 第6巻(1929-30)〔以下 GB と略す〕記載のマラヤの中薬群との間で、やや荒っぽい方法ではあるが、個々の中薬の対応づけを試み、それぞれの中薬群と共通する中薬を導き出し、それを量的に比較検討した。

本報ではそれをうけて、その際、同時に導き出された相互に非共通の中薬を検討の対象としている。すなわち、中薬の変動性に着目するとき、前報ではどの程度変わらなかったのかを検討したが、本報では、変わったと考えられる中薬が、どのような系統の生薬であるかを検討しようとしている。

しかし、生薬の系統を精確に探ることは非常に難しい問題を含んでいる。数多くの生薬の一つ一つを精密に検討することは、現在の状況では不可能に近い。そこで、本報では、シンガポールの中薬のうちで、葯材学に記載のなかった生薬が、中国系薬物書(主としてローカルな薬物を取りあつかったもの)、インド系およびマラヤ系薬物書などの文献を用いて、どの記載に対応するかを検討する。該当する薬物は約180品目あるが、そのうち基原を同定あるいは推定し得た約140品目の個々について文献中にどのように記載されているかを述べながら、その系統について検討する。

* 京都大学薬学部生薬学教室

† 「シンガポールの中薬(3)」『東南アジア研究』(1972)Vol. 10, No. 2, pp. 335-350.

Ⅱ 文 献 に つ い て

中国系文献として

- (1) G. A. Stuart: *Chinese Materia Medica* (1911)
- (2) 常用中草薬手冊 (1970)
- (3) 陸君立：実用生草薬典 (1949)

インド系文献として

- (4) G. Watt: *A Dictionary of the Economic Products of India*. Vol I~VI (1885~1893)
- (5) K. R. Kirtikar & B. D. Basu: *Indian Medicinal Plants* (1918)
- (6) R. N. Chopra: *Glossary of Indian Medicinal Plants* (1956)

ほかに *Gardens' Bulletin* 6, (6)~(10) pp. 165~321 (1929-30) に I. H. Burkill および M. Haniff による “Malay Village Medicine” と題する論文があるが、その内容は I. H. Burkill 著 *A Dictionary of Economic Products of Malay Peninsula* (1935), 改訂版 (1966) (DEPMP と略す) に、ほとんどすべて組みこまれている。またこれはインド系文献の(4)がモデルになっており、マレーシアおよびインドネシアのほぼ全域にわたる物産誌ともいうべきもので、各々の物産の出自は問題としていないが、現状は正確に表現していると考えられる。この中の薬物については K. Heyne の *Nutt. Plant Ned. Ind. ed. of 1929* や *Rumphs' Herb. Amboin Vermeerd.* などの引用も少なくない。以上の理由で薬物の系統を探る文献としては不適当であるけれども、その記載は充分参考になった。

ここにあげた文献について、その特徴ないしはその選んだ理由を簡単に記しておく。

- (1) *Chinese Materia Medica* (略称：CMM)

中国大陸においてキリスト教の布教のため各国から多数の宣教師達が派遣されたが、各地での布教活動の傍ら、自分達のために当時実際に使われていた中薬を収録し、それらの基原植物あるいは用法などを書き込んだパンフレットをつくっていたが、1871年 F. P. Smith がそれを集めてまとめ、*Materia Medica & Natural History of China* という題名で出版した。さらに後日 G. A. Stuart が、他のパンフレットなども参考とし、基原植物も再検討して改訂版として出版したものが *Chinese Materia Medica* (1911) である。したがってここに記載された薬物は19世紀前半までに中国の比較的広い地域で実際に使われていた伝統的および民間薬的薬物を含んでいると考えられる。

- (2) 常用中草薬手冊 (略称：常中草薬)

現在中国において中医および医薬衛生技術師等の便宜のために編集されたもので、比較的新しい薬物参考書といえる。これには約400品目の植物性薬物が植物図版と共に収載されている。そのうち100余種の植物は中国全域にみられるが、残りの約300種は主として中国南部に産する

もので、それらはごく普通にみられる植物であり、中医らが自採、自製、自用とすることができるという。したがって本書は一種の手引書であり、その中には現在中国南部で使用されている民間薬が多数含まれていると考えられる。

(3) 実用生草薬典（略称：実生薬）

著者は中華国医学会附設医師研究所の生草薬学教授である。本書に記載された植物は、1949年当時の中国南部、主として嶺南（広東および広西）地方の民間薬で、植物の性状、用部、用途などを記載している。しかし残念なことにラテン名がない。嶺南は東南アジアの華僑の出身地であるから、ここに表現された生薬名、植物名あるいは別名を有力な手がかりとして、性状の記載に一致するものや類似するものを選ぶことはできる。(2)と比較するとき薬物の採取および利用地域がやや限られていることから、より民間薬的色彩の濃厚な文献である。

(4) A Dictionary of the Economic Products of India（略称：DEPI）

19世紀末にまとめられたインド物産誌で、薬用植物はそう多くはないが、インドにおける伝統的薬物のほかに、広く民間薬的なものも含まれている。

(5) Indian Medicinal Plants（略称：IMP）

1910年12月から1911年2月にかけて Allahabad で伝統的生薬の博覧会が開催された。そこでその出品物を植物学的に同定し、植物の性状、生薬としての用部、用途、用量、生理作用、土名、採取法などを詳しく収載したもので、1381種類の植物を含む。この中には主としてインドの伝統的医学アユルヴェーダで使われる薬物および民間薬の中でも比較的広い地域で使われているものが収載されていると考えられる。

(6) Glossary of Indian Medicinal Plants（略称：GIMP）

今世紀初頭1926年頃から Indian Council of Agricultural Research および Council of Scientific & Industrial Research が中心となり、インド各地に分散している医学関係（おそらく伝統医学が主）の文献を収集し、一方ではあらゆる医療機関において、また家庭において使用されている薬物を調査し、植物の同定、土名、用部、用法などを精査して集大成したものである。ただしインド各地のバザールでみられる薬物については、インド基原でないことが明瞭な場合は、その出所を付記して記載し、それ以外の場合は除いてある。つまりこの文献のねらいはインドで発生し、発展した薬物を正確に描き出そうとしているので、その結果近年流通によってもたらされ、現在市場でとり扱われている出所不明の薬物を除いてしまったため、インドにおける現市場の（正確には20年前であるが）生薬の全部は記載されていない。しかし本稿の目的とするインド系薬物かどうかを探る文献としては誠に好都合であり、伝統的薬物に加えて、今世紀初頭までの民間薬をも知る上に絶好の文献である。この中には約1600種の植物が記載されているが、IMP とちがって、植物の性状などはいっさい省略されているので、生薬の同定には使い難い。しかし本書は土名の索引もあるので、中薬でなくインド生薬を調べる上には有力

な手引書となるであろう。

Ⅲ 個々の中薬についての検討

Ⅱの文献によりその系統を検討し、学名についてはだいたい Index Kewensis にしたがって訂正し、(I.K.→で示す) Engler の順に記載した。また記載のあったもののみ記したので、ここに書かれていない時はその文献にはなかったということである。

(1) S 434 海带 (その他) *Laminaria saccharina* Lam. (Laminariaceae) [GB, CMM (昆布), IMP, GIMP]

CMM の Algae の項目中に上記のほか海藻として *Sargassum siliquastrum* があげられ、海带、海藻、海蘊、昆布は区別されずに、同用途に使われていたらしい。IMP および GIMP によればヒンズー語で *Galpur-ka-patta* といい、甲状腺腫の治療薬およびヨード源とされている。

(2) S 466 白石衣 (その他) *Gyrophora vellea* Ach. (Umbilicariaceae) [GB (石耳), DEPMP]

DEPMP によれば中国で薬用とする。またその近縁種である *G. esculenta* Miyoshi (和名イワタケ) は中国で食用とする。

白石衣は表面はざらざらで黒く、裏面は灰色で、付着部が突起するほかは、薄い岩上地衣である。

(3) S 465 山树菇 (その他) *Trametes sanguinea* (Fr.) Lloyd (Polyporaceae) [GB (紅菇), DEPMP (*Polystictus sanguineus* Fries)] (和名ヒイロタケ)

GB および DEPMP の学名は synonym である。本品は橙色の固いきのこで、DEPMP によればマラヤ系であり、いろいろな用途に使われるが、だいたい外用である。

(4) S 441 金不换 (全草) *Lycopodium serratum* Thunb. (Lycopodiaceae) [GB] (和名トウゲシバ)

金不换は同名異物がある。CMM では *Gymra pinnatifida* DC (Compositae) の根をいう。常中草薬では *Stephania sinica* Diels. (Memispermaceae) の塊根である。CMM では *L. japonicum* (= *L. clavatum* L. var. *nippomicun* 和名ヒカゲノカズラ) をいう。これはまた玉柏、千年柏、万年松、石松などの別名がある。

Lycopodium 属で全草を使うものも多い。DEPI および GIMP では *L. clavatum* L., DEPMP では *L. cernum* L. および *L. phlegmaria* L. で、これらは東南アジアで得やすいといっている。

L. clavatum は温帯、*L. serratum* は暖帯に分布する植物である。

(5) S 401 卷柏 (全草) *Selaginella tamariscina* (Beanv.) Spring (Selaginellaceae) [常中草薬 (卷柏)] (和名イワヒバ)

CMM, GB, 現代実用中薬では卷柏に対し, *S. involvens* Spring 和名カタヒバをあてる。また CMM では卷柏の別名として, 前出の金不换, 玉柏, 千年柏, 万年松, 石松をあげ, *Lycopodium serratum* をあてている。これはこの2種類だけでなく同属近縁種のいくつか, かなり広地域で同用途で使われたと思われる。

(6) S 607 龙蕒草 (全草) *Selaginella* sp. (Selaginellaceae) [推定]

台湾薬用植物誌の *S. plana* Hieron 和名トリノハカタヒバによく似ている。

中薬通報 5, 90-91 (1959) に江西, 滇南一帯 (雲南) に龙須あるいは翠云草として *Selaginella* spp. をあげ, 伸筋草 *Lycopodium cernuum* および *L. obscurum* と同用途をもつといっている。嶺南采薬録の龍鱗草は *Desmodium strychnifolium* (Leguminosae) で全く別物である。

(7) S 400, 611 接骨草 (全草) *Equisetum ramosissimum* Desf. (Equisetaceae) [推定]

同名異物がある。GB では駁骨草に *E. arvense* L. 和名スギナ, CMM では *E. hymale* L. 和名トクサを接骨草あるいは木賊といい, *E. arvense* を問荆, 台湾薬用植物誌では *E. ramosissimum* を節節草, *E. debile* Roxb. を接骨筒, 常用中草药では木賊 (= 节节草, 笔管草) に *E. debile* をあて, その図ではトクサでもスギナでもないイヌトクサ型のものが出ている。そして同属異種植物も薬用として支障なしといっている。すなわち同属異種植物間で, 生薬名との混乱が常に生じるものである。

GIMP にも *E. arvense* が記載されている。

(8) S 583 松枯毛 (葉) *Pinus massoiana* D. Don (Pinaceae) [嶺南采薬録, 実生薬 (山松毛, 赤松, 万年松, 占松の葉)]

Pinus 属は主として樹脂類, 材, 種子, 胞子が薬用とされる。

(9) S 320 松雷粒 (果実) *Pinus* sp. (Pinaceae) [推定]

まつかさを使うという記載はまだ文献でみたことがない。

(10) S 170 麻黄根 (根) *Ephedra sinica* Stapf, (Ephedraceae) [常用中草药, GB (麻王根)]

I.K.

CMM では *E. vulgaris* Rich. → *E. distachya* L. の根を狗骨といい, 地上部とは別の用途に使われる。IMP では *E. vulgaris* および *E. pachyclada* Boiss の根および全草, GIMP
I.K.
では *E. gerardiana* Wall → *E. distachya* の根および茎を使う。インドでも中国でも以前は *E. distachya* が使われていたが, 現在は *E. sinica* にかわったのだろうか。

(11) S 427 田枝黄 (全草) *Houttuynia cordata* Thunb. (Saururaceae) [推定] 和名ドクダミ

CMM では葎, 蒹葭, 魚鯉草, 本邦においても民間療法的な解毒剤として使われる。

(12) S 188 胡椒根 (根) *Piper longum* L. (Piperaceae) [GB (萆薢), CMM (萆薢), DEPI, IMP, GIMP]

植物の分布および名前からこれはインド系生薬であるが、かなり古い時代に中国に入ったものであろう。

インドでは薬用とされる *Piper* 属は多いが、根を使うものは *P. longum* と *P. betle* L. であり、後者は betel chewing の葉の基原植物であると同時に全用部が使われるが *P. longum* のほうは根のほかは果実が使われるだけである。

CMM では *Chavica roxburghii* Miz (= *P. longum* L.) の根を萆薢、その偽物である茎を萆薢没といい、他種は記載されていない。

GIMP では根を薬用とする *Piper* 属は前出2種のほかに *P. attenuatum* Buch.-Ham. および *P. sarmentosum* Roxb. があり、これらはローカルな生薬と思われるが、本生薬の基原ならびに品質については、なお研究されなければならない。

(13) S 47 春根皮 (皮, 飲片), S 552 榲白皮 (皮, 生) *Betula utilis* D. Don (Betulaceae) [GB, (樺), IMP, GIMP]

この生薬名は本来 *Cedrela sinensis* Juss. (Meliaceae) あるいは *Ailanthus altissima* Sw. (Simaroubaceae) に使われたものであるが、発音の関係で誤って *Betula* があてられた。*

DEPI および CMM に記載されている *B. alba* L. (樺木, 榲木) はヨーロッパ樺である。

(14) S 595 風栗壳 (果実, いが) *Castanea mollissima* Bl. (= *C. duclouxii* Dode) (Fagaceae) [現代実用中薬]

I.K.

CMM では *C. vulgaris* Lam → *C. sativa* Mill. 実生薬ではいがを風栗壳, 風筋壳, 海擦という。

(15) S 476 榕樹根 (根) *Ficus retusa* L. (Moraceae) [GB, (榮樹須), CMM (榕鬚), 常中草薬 (*F. microcarpa* L.), DPEI, IMP, GIMP, 台湾薬用植物誌] 和名ガジュマル

F. retusa L. と *F. microcarpa* L. は Synonym である。

Ficus 属には気根の発達する種が多いことおよびインドでは根を薬用とする *Ficus* 属が本生薬も含めて数種類ある。

(16) S 180 風不動 (茎・材) *Ficus* sp. (Moraceae) [推定]

台湾植物名集にはこの名称あるいは類似のものが数個あるが、そのうち *F. pumila* L. 和名オオイタビが最も近いと思われる。荻野謙治博士はこれを *Ficus* sp. と推定している。

(17) S 185 川破石 (根) *Cudrania cochinchinensis* (Laur.) Kudo et Masam. (Urticaceae) [常中草薬 (穿破石)?]

GB の穿破石は基原が不明、しかも筆者の入手したものと同生薬かどうかについても判断し難い。

* GB (1929) 6, 23

- (18) S 94 山茨茹, S 422 金耳環 (全草) *Asarum* spp. (Aristolochiaceae) [推定]

両生薬は同属異種であり、細辛に似ているが、それに一致しない。

I.K.

CMM の山慈姑、山慈茹は *Orithyia edulis* Miq. → *Tulipa edulis* Baker (Liliaceae) の鱗茎、GB. の金耳環は *Lycopodium serratum* Thunb. (Lycopodiaceae) (異名金不换) である。実生薬の金耳環、耳環草の記載は“形以細辛比之粗頼、其茎葉如生半夏葉、味辛苦”で、基原植物名はないけれども *Asarum* 属と推定される。DEPI および GIMP には *A. europaeum* L. の根、葉の記載がある。

- (19) S 372, 373 蕎麦子 (種子) *Fagopyrum esculentum* Moench (Polygonaceae) [GB (新蕎麦), CMM (蕎麦, 苡麦, 烏麦, 花蕎, 甜蕎)] 和名ソバ

CMM によれば葉、茎も薬用、また種子は食用にもなる。DEPI および GIMP では上記のものは *F. tataricum* Gaertn. 和名ダッタンソバおよび *F. cymosum* Meissn. シャクチリンバと共に食用である。近年 *Fagopyrum* 属の葉および花にビタミン P 作用 (血清強化) を有するルチンが含有されているとの報告がある。*

- (20) S 110 白头翁 (全草) *Polycarpaea corymbosa* Lam. (Caryophyllaceae) [GB, DEPI, IMP (葉), GIMP]

薬材学の白头翁は *Pulsatilla chinensis* Regel (Ranunculaceae) の根で、同名異物がある。

本生薬はインド系であるが、いつの頃から中国にとりこまれたのであろうか。

- (21) S 239 白蓮花 (花) *Nelumbo nucifera* Gaertn. (Nymphaeaceae) [GB, (仁蓮花), CMM (菡萏), IMP, GIMP] (和名ハス)

ハスのほぼ全用部が使われる。中国系文献では特に根茎、葉、葉柄、種子、果実、雄蕊、胚芽および花托である。花 (花卉) はインド系文献にみられるので、その使い方もインド系であろう。

- (22) S 195 荷連葉 (葉) *Nelumbo nucifera* Gaertn. (Nymphaeaceae) [推定] 和名ハス

通常荷叶あるいは蓮葉といえはハスの葉で、葉柄基部を含む生薬である。本品は基部を含まず、大きい葉上面を内側にして端から巻き、径約 4 cm、長さ約 6 cm、中央でくくって俵状としたもので、薬材学にはこの形で生薬の記載がない。

- (23) S 57 凤尾蓮 (全草) *Coptis teeta* Wall. (Ranunculaceae) [CMM, 薬材学]

第Ⅰ報において本生薬を *C. anemonifolia* Sieb et Zucc. (GB) としたが、上記の学名に訂正する。というのは *C. anemonifolia* は本邦のオウレンに対して名づけられたものであるが、それは *C. japonica* (Thunb.) Makino と訂正され、特産とされているからである。一方薬材学によれば、家連 (栽培黄連) の比較的若いものを福建で凤尾連という。しかしこれは茎葉が

* 今井ら：薬誌 (1971) 71 266

小澤光、奥田朝晴：薬学 ルチンの化学と薬理作用

除去されたものである。CMM およびインド系3文献でも使われるのは根茎である。

(24) S3 淮木通(茎・材) *Clematis montana* Buch-Ham. ex DC (Ranunculaceae)〔常中草薬(淮通)〕

薬材学において木通の基原としては *Hocquartia manshuriensis* Nakai (Aristolochiaceae) を代表に、附註の項では *Akebia quinata* (Thunb.) Decaisne 和名アケビ (Lardizabalaceae) —商品名海風藤一、四川業者のものとして *Clematis pavoliniana* Pamp. 山木通および *C. armandi* Frauchet 小木通を記載している。本生薬は淮河地方産木通と考えられるので、それらと産地が一致しないため、基原を常中草薬によった。GB では既に2種類が識別され、廣木通を *Akebia quinata* および牆木通を *Clematis* sp. (広東産) としている。CMM にもこれら2種があり、*Akebia quinata* は北京市場品で、一方税関リストには輸出港により *Clematis heracleaefolia* DC (Newchwang), *C. grata* Wall (Hankow), および *C. cf. sinensis* Lour. I.K. (Ningpo, Canton) → *C. chinensis* Retz. となっている。

以上のことから木通の基原として地域によりウマノスズクサ科 (Aristolochiaceae), アケビ科 (Lardizabalaceae) およびキンポウゲ科 (Ranunculaceae) の蔓性植物があげられており、また *Clematis* 属のなかでもいくつかの種が記載されているので、詳細な研究が必要である。なおインド系文献においても薬用とする *Clematis* 属が数種類記載されているが、そのうちで茎を使うものは *C. gouriana* Roxb. だけで、大部分は葉を使い、しかも DEPI によれば CMM の *C. grata* Wall および常中草薬の *C. montana* は薬用としていない。以上のことから *Clematis* 属の利用はインドと中国でそれぞれ独立的であると思われる。なお本邦では木通といえば *Akebia quinata* アケビを指すが、これは本草綱目啓蒙以降である。*

(25) S181 黄藤根(茎・材) *Arcangelisia loureirii* (Pierre) Diels? (Menispermaceae)〔常中草薬(黄連藤)〕

GB では黄藤として *Fibraurea tinctoria* Lour. (Menispermaceae), 用部は根および茎で、マレー系生薬と思われるものがある。本生薬はこれにたいへん近縁と考えられる。DEPMP によれば *Arcangelisia* 属は近縁の *Anamirta* 属、特に *Anamirta cocculus* (魚毒植物) と混同されている。*Anamirta* 属はインド、ビルマ、タイ、インドシナおよびジャワに分布するが、マレー半島部にはみられない植物である。この果実はインドで頭虱の駆除および皮膚病に外用する。*Arcangelisia flava* は魚毒としても使われるが、berberine を含有するので医薬品としても重要である。

一方 *Fibraurea* 属はインドからマレー半島にかけて分布し、染料としてインドでは *F. tinctoria* Lour, 北東インドでは *F. trotteri* Watt, マレー半島では *F. choroleuca* を使う。これらはいずれも berberine を含有し、マレー半島では薬用にもする。

* 小野蘭山：本草綱目啓蒙(1803)

以上から本生薬の基原については *Arcangelisia* 属か *Fibraurea* 属か不明であるが、薬物として使用されたのはマレー半島が最初であると思われる。

(26) S 164 清風藤（茎・材）*Sinomemium acutum* (Thunb.) Rehd. et Wils. および var. *cinereum* Rehd. et Wils. (Menispermaceae)〔中薬志，和漢薬名彙〕和名オオツツラフジ

中薬志では上記のほかに青風藤，青藤，大風藤（湖北名）と異字名および別名がある。ほかに清風藤科 *Sabiaceae*. の清風藤 *Sabia japonica* Maxim 和名アオカズラという同名異物もあるが，これが生薬となることは極めて稀であるという。

本邦ではオオツツラフジを漢防己というが，これは本草綱目啓蒙以後である。*

(27) S 577 山蒼根（根）*Litsea cubeba* Persoon (Lauraceae)〔常中草薬（山蒼樹一植物名一），台湾薬用植物誌〕

本生薬の果実を山蒼子という（薬材学）。常中草薬によれば，根のほかに茎，葉，果実も薬用とする。

(28) S 33 千下槌（茎・材）*Lindera chiunii* Merr. (Lauraceae)〔常中草薬（千打鍾）〕

基原植物は広西および広東に分布する。

(29) S 325 樟木子（果実）*Cinnamomum camphora* Sieb.? (Lauraceae) [常中草薬，
I.K.
GB (*C. camphora* Nees), CMM (*Camphora officinarum* Nees ex Wall → *Cinnamomum camphora* T. Nees & Eberm.)] 和名クスノキ

本生薬は本邦でみられるクスノキの果実とやや異なり，色はかっ色，形はやや大きく，不整形である。

(30) S 417 無根草（全草）*Cassytha filiformis* L. (Lauraceae) [DEPI, IMP, 台湾薬用植物誌] 和名スナズル

台湾植物名彙によれば上記のほかに *Cuscuta australis* L. (Convolvulaceae) 和名マメダオシを無根草という GIMP でも *Cuscuta hyalina* Roth および *C. reflexa* Roxb. はインドに分布し，全草を薬用とする。

Cassytha filiformis L. は本邦暖地から中国および東南アジアにかけて分布する。

本生薬はマメダオシよりもスナズルに近いが，*Cuscuta* 属の他種である可能性もある。

(31) S 311 英粟壳（果皮）*Papaver somniferum* L. (Papaveraceae) [DEPI, CMM, GB (粟壳)] 和名ケシ

ケシの未熟果実に切傷をつけ浸出する乳液を集め，乾かして，かっ色の塊となったものが阿片である。本生薬は多分その後完熟させた後に採取したものであろう。

果皮を使うものとして IMP に *P. Rhoeas* L., GIMP に *P. nudicaule* L. が記載されているが，これらはインド原産ではない。

* 藤田直市：薬学雑誌（1926）46, 725～736

(32) S 241 金笑梅 (全草) *Drosera Burmanni* Vahl (Droseraceae) [GB (錦地蘿), 実生薬 (錦地蘿, 一朵芙蓉花, 連地蘿), GIMP] DEPI によれば *D. peltata* Sm. ex Willd. の葉を使うが上記の植物は使わないという。IMP では *D. peltata* の葉を使い, GIMP では葉および全草, 上記植物および *D. indica* の全草を使うという。

(33) S 575 薔薇根 (根) *Rosa multiflora* Thunb. (Rosaceae) [CMM, 古今薬物別名考] 和名ノイバラ

古今薬物別名考ではノイバラを薔薇といい, 用部は根, 花, 果実で, それぞれ根名を牆藤, 山棘, 牛勒, 牛棘, 花名を刺玫花, 果実名を宮実という。CMM では *R. multiflora* = *R. indica* L. で, 用部は根, 葉, 花 (仏見笑), 果実 (宮実), 全草 (牆藤) である。DEPI および IMP では, *Rosa* 属は花を使い, GIMP で根を使うものは *R. banksiae* R. Br (中国原産) および *R. centifolia* L. (コーカサス原産) の2種で, *R. multiflora* は果実を使うという。

(34) S 175 (根), S 176 (茎・材) 金英根 *Rosa laevigata* Mich. (Rosaceae) [CMM, GB (英根)]

上記植物の薬用部は果実 (金桜子), 種子, 花, 葉, 根, 根皮である。したがって, S 176の茎・材からなるものは根の代用品であろうか。

(35) S 317 雪梨干 (果実), S 315, S 316 雪梨皮 (果皮) *Pyrus sinensis* Mich. (Rosaceae) [CMM, GB]

文献の薬用部は果実である。

(36) S 435 北紫草 (全草) *Potentilla sericea* L. (Rosaceae) [GB (紫草), GIMP]

GIMP で上記のほかに *P. anserina* L. の全草, 根, 葉, *P. kleiniana* W. & A. の葉, 根, 茎, *P. reptans* L. の全草, 根も使うという。

(37) S 190 一条根 (根) *Flemingia congesta* Roxb.? (Leguminosae) [推定]

I.K.
荻野謙治氏による。台湾植物名彙では *Desmodium pseudo-triquetum* DC → *D. triquetum* I.K.
DC, 台湾薬用植物誌では *Moghamia lineata* O.K. → *Flemingia lineata* Roxb. である。

GB に一条根の名はあるが基原は同定されていない。インド系3文献には数種の *Flemingia* 属の根が薬用とされている。

(38) S 469 血風根, S 470 地風根 (茎・材) *Millettia* cf. *congestiflora* T. C. Chen (Leguminosae) [药材学 (密花崖豆藤)]

药材学に2種類の雞血藤が記載されているうちの一つであるが, 標品あるいは類同品との比較による確認はまだしていない。

GB の地風 (根) は基原が記載されておらず, 本生薬との同定も難しい。

GIMP には *M. auriculata* Baker および *M. pachycarpa* Benth. が記載されている。

DEPMP ではマラヤの民間薬として *M. hemsleyana* Prain および *M. sericea* Benth. を

あげ、これらの葉は菌痛ほか多目的用途をもつが、後者の根はジャワにおいて人および家畜の傷口の消毒剤として、またモルッカ諸島では魚毒として使うという。（K. Heyne; Nutt. Plant Ned. Ind. ed. of 1927, p. 779 から引用）

(39) S 165（根）、S 166（茎・材）牛大力 *Millettia speciosa* Champ. (Leguminosae)〔常中草药〕

根が本来の薬用部である。S 165と166はロットちがいで、茎・材からなるS 166は品質的にやや劣等品と考えられる。

(40) S 312 菜豆壳（果皮）*Vigna catjang* Walp. (Leguminosae) [GB（白豆殻）]

本植物は熱帯の作物で、種子を食用とする。GB および DEPMP によれば、華僑がこの種子の粉末から一種のめん類をつくっているのです、その際の副産物として多量に産出されるという。また本植物の葉はマラヤで薬用とされるという。

(41) S 398 人字草（全草）*Zornia dephylla* (L.) Pers. (Leguminosae)〔常中草药〕和名スナジマメ

DEPI および GIMP によればインドにおいて本植物の根を子供の眠り薬として使うという。それはこの植物の葉が夜閉じるという現象からきている。

(42) S 418 千里光（全草）*Lespedeza cuneata* (Dn Mont de Courst) G. Don (Leguminosae)〔台湾薬用植物誌〕和名メドハギ

CMM. 常中草药では千里光、千里及、九里明に対し、*Senecio scandens* Buch-Ham. (Compositae) をあて、また GB ではそのほかに *Blumea chinensis* DC (Compositae) をあてている。

DEPMP では *Lespedeza* 属は薬用でなく飼料とされるという。

したがっていつのまにか、どこかで基原植物がいかかわってしまったとしか説明のしようがないものである。

(43) S 426 古苏草（全草）*Lespedeza* sp. (Leguminosae)〔推定〕

形状から *L. cyrtobotrya* Miq. 和名マルバハギに極めて類似する。

(44) S 168 川山龍（根）*Bauhinia* sp.? (Leguminosae)〔嶺南采藥録（過江龍）、実生薬（過江龍、川山龍、三角風簾）〕

常中草药では過江龍として *Entada phaseoloides* (L.) Merr. (Leguminosae)、用部は種子および藤である。インド系3文献上によれば、数種類の *Bauhinia* 属が使われるが、根を使うのは *B. purpurea* L. である。また DEPMP ではジャワで *B. acuminata* L. の根を使うという。

(45) S 238 楊桃花（花）*Averrhoa carambola* L.? (Oxalidaceae) [DEPMP]

CMM によれば楊桃あるいは羊桃は *Actinidia chinensis* Planch. (Actinidiaceae) の果実を

指すが、中国南部ではこれではなく *Averrhoa carambola* L. の果実をいう。DEPMP によれば別種 *A. bilimbi* L. のほうがよく使われ、ジャワで今も使うという (K. Heyne 1927 からの引用)。しかしベトナム、トンキンでは *A. carambola* の花を使い、マラヤでは *A. bilimbi* の代用として使うという。(Burkill and Harrieff: Medical Book of Malayan Medicine からの引用)

(46) S182 黄皮根 (根), S368 黄皮核 (種子) *Clausena Wampi* Oliver (Rutaceae) [GB, CMM (根, 種子)]

CMM によれば薬用部は根および果実 (黄皮果という) である。常中草薬では *C. lansium* (Lour.) Skeels (= *C. wampi* Blanco, GIMP) の種子を黄皮核といい、GIMP では果実を使うという。近縁種間でやや学名が混乱しているが、解明する手がかりがなかったので、そのままあげておく。

(47) S244 桔紅花 (花) *Citrus Aurantium* L. (Rutaceae) [GB (橘紅花), IMP, GIMP]

CMM では *C. decumana* Murr. ほかに 2~3 の近縁種の花および果実、葉、GB では *C. grandis* Osbeck, GIMP ではそのほかに *C. medica* L. も薬用とする。

(48) S367 柚子核 (種子) *Citrus grandis* Osbeck (Rutaceae) [GB (柚核)] 和名ザボン
I.K.

CMM では orange seed として *C. nobilis* Lour. → *C. aurantium* L.) ほかに同類の種子が使われ、IMP では *C. medica* L. を使うという。

(49) S321 金桔乾 *Fortunella japonica* sw. (Rutaceae) [CMM, GB (金橘, *Citrus japonica* Thunb.)] 和名キンカン

本植物は中国からベトナムにかけて分布し、本邦では栽培である。

(50) S475 刺刀根 (根) *Zanthoxylum avicennae* (Lam.) DC (Rutaceae) [常中草薬 (刺倒樹), 鳥不宿, 鷹不宿)]

(51) S481 刺公猫 (茎・材) *Zanthoxylum cf avicennae* DC (Rutaceae) [推定]

(52) S548 大刺頭, S549 珍珠癩 (茎・材) *Zanthoxylum* sp. (Rutaceae)

(50), (51), (52) の 4 生薬は非常によく似ているので、ここでまとめて述べる。

CMM では *Z. piperitum* DC 川椒 (蜀椒) 和名サンショウの根および *Zanthoxylum* sp. 蔓椒の根および茎を使うという。GB では鳥不宿に対し *Zanthoxylum* sp. をあてている。S475 刺刀根は *Z. piperitum* に一致しないので、ひとまず常中草薬にしたがっておく。S481 刺公猫は S475 刺刀根とほとんど区別ができないが、ずいがあるのでこれは枝である。S548 大刺頭および S549 珍珠癩は前 2 者と似ているが、皮部がうすいことと刺の基部が縦長で長さ 3 mm、高さ約 5 mm の上向きの刺がある点で異なっている。(S481 刺公猫の刺はコルク質で半球型の上に鋭い針のような形である)。そしてこの刺は比較的不規則に分布している。したがって刺公猫は太い幹の、大刺頭と珍珠癩はそれより細い枝とも思われる。

インド系 3 文献でもある種の *Zanthoxylum* 属の枝、刺あるいは根を使うという。

参考のために形態的に類似する *Zanthoxylum sinensis* および *Kalopanax pictus* (Araliaceae) とこれら 4 生薬の皮部について行なった Chemical Screening Test の結果をあげておく。

検 体	Alkaloid (Meyer test)	Triterpenoid or Steroid (Liebermann-Burchard test)	Phenolics (FeCl ₃ test)	Saponin (Bubble test)
S 475 刺刀根	+	+	—	—
S 481 菊公猫	++	+	—	—
S 548 大刺頭	+	+	—	+
S 549 珍珠癩	+	+	—	+
<i>Zanthoxylum simulans</i> Hance* トウザンショウ, 川椒, 花椒, 蜀椒	+	+	—	+
<i>Kalopanax pictus</i> (Thunb.) Nakai* ハリギリ, 刺楸樹	—	++	+	±

* 北村ほか：『原色日本植物図鑑木本編Ⅰ』（1972）

(53) S 472 椿根藤（茎・材）*Ailanthus altissima* (Mill) Sw.? (Simaroubaceae)

(54) S 48 梛白皮（皮）*Ailanthus altissima* (Mill) Sw. (Simaroubaceae) [CMM, DEPI, IMP, GIMP]

(55) S 467 白椿根（根）*Cedrela sinensis* Juss. (Meliaceae) [CMM]

(56) S 553 白春根皮（皮）*Cedrela sinensis* Juss. (Meliaceae) [CMM, DEPI, IMP, GIMP]

これら 4 生薬は先に述べた S 47 春根皮および S 552 梛白皮と共にその生薬名に類縁があり、かつ、生薬もよく似ているため、基原に混乱があるのでまとめて述べることにする。

CMM, DEPI, IMP および GIMP において、*Ailanthus* および *Betula* 属の樹皮だけが薬用となるが、*Cedrela* 属は CMM によれば、枝、根、皮および果実、IMP および GIMP でも皮および花を使うという。

入手した関係のある生薬は 6 品目で、用部および基原植物の関係は次の通りである。

No.	生 薬 名	用 部, 形 状	基 原
S 47	春 根 皮	樹 皮, 飲 片	<i>Betula utilis</i> (Betulaceae)
S 552	梛 白 皮	〃 , 生	〃
S 48	〃	〃 , 飲 片	<i>Ailanthus altissima</i> (Simaroubaceae)
S 553	白椿根皮	〃 , 生	<i>Cedrela sinensis</i> (Meliaceae)
S 467	白 椿 根	根 , 飲 片	〃
S 472	椿 根 藤	枝 , 生	<i>Ailanthus altissima</i> (Simaroubaceae)

これらの基原植物の文献上の用部は次の通りである。

基 原 植 物	CMM	DEPI	IMP	GIMP
<i>Ailanthus altissima</i>	皮	皮	皮	皮
<i>Betula utilis</i> 外, 近縁種	皮	皮	皮	皮
<i>Cedrela sinensis</i>	皮, 枝 根, 果実	皮	皮, 花	皮, 花

この表からもわかるように、枝あるいは根を薬用とするものは *Cedrela* 属であるが、なお外観上 *Cedrela* および *Ailanthus* に非常によく似ている *Choerospondias axillaris* (Roxb.) B. L. Burtt et A. W. Hill (Anacardiaceae) 和名チャンチンモドキとも比較した上で、その基原を解明するつもりである。

(57) S 187 橄欖根 (根) *Canarium album* Raeush? (Burseraceae)

CMMに橄欖の果実および核 (種子) を薬用とする記載はあるが、根については何も言及していない。

(58) S 374 油桐子 (種子) *Aleurites triloba* Forst (= *A. molluccana* Willd.) (Euphorbiaceae) [CMM (石栗), DEPI, IMP, GIMP]

CMM では果実および種子油, IMP でも種子油を使う。

(59) S 8 鸡骨香 (根) *Croton crassifolius* Geisel. (Euphorbiaceae) [常中草薬, 実生薬]

CMM および GB によれば *Aquilaria* 属特に *A. agalocha* Roxb. (Thymelaeaceae) を鸡骨香という。この植物は沈香の基原植物であり、材に芳香ある樹脂を含有する。

本生薬は細い根で喬木の根というより、多年生草本の根と思われる。

(60) S 578 克面風 (根) *Breynia fruticosa* (Muell.-Arg.) Hook. f? (Euphorbiaceae) [雷州半島の植被 (黒面神)]

GB では黒面神に *Phyllanthus* sp. (Euphorbiaceae) をあて、葉を混入する細い枝であると記載されているが、これは本生薬に一致しない。

(61) S 479 柚柑根 (根) *Phyllanthus emblica* L. (Euphorbiaceae) [常中草薬 (余柑子), IMP, GIMP]

DEPMP によれば本植物の各部はインドにおいてよく利用され、根は吐剤になるという。

(62) S 471 大疔癰 (根) *Euonymus laxiflorus* Champ. ex Benth. (Celastraceae) [台湾薬用植物誌 (大丁黄, 大疔黄)] 和名シマアズサ

GB には大丁王として *E. pellucidifolius* Hayata (台湾産) が記載されているが、その名称はもとはマメ科の *Erythrophloeum Fordii* (広東産) のものであったという。

(63) S 207 桑芽茶 (葉) *Acer ginnala* Maxim. (Aceraceae) [江苏省植物薬材誌]

IMP では *A. pictum* Thunb. の枝, 葉, GIMP では葉および皮を使うという。

(64) S 245 龍眼花 (花), S 369 龍眼核 (種子) *Nephelium longana* Camb. (Sapinda-

ceae) [CMM]

CMM では花、種子のほかに葉、果実、GB では花、葉、GIMP では果実を薬用にするという。また IMP には中国で果実を食用あるいは薬用とするという記載がある。

(65) S 370, S 371 木患子（果実）*Sapindus Mukurossi* Gaertn. (Sapindaceae) [常中草薬, GB, CMM, DEPI, IMP, GIMP] 和名ムクロジ

(66) S 410 山葡萄（全草）*Vitis bryoniaefolia* Bunge (→ *V. vinifera* L.) (Vitaceae) [CMM (山葡萄, 野葡萄, 蔓萋), IMP, GIMP] I.K.

CMM では地上部（つる）と根とは別の用途で使われ、また I. K. では synonym としているが、葡萄酒をつくるという *V. virrifera* 葡萄とは別種としている。常中草薬によれば *Ampelopsis frevipedunculata* (Maxim.) Koehne をあてているが、これは本生薬に一致しない。

(67) S 209 布渣葉（葉）*Microcos paniculata* L. (→ *Grewia Microcos* L.) (Tiliaceae) [常中草薬, GIMP] I.K.

GIMP によれば *G. paniculata* Roxb. の根はインドシナおよびマラヤで薬用とされているという。また DEPMP ではマラヤにおいて上記植物の葉および根を薬用とするという。

(68) S 289 茺蔚子（種子）*Corchorus capsularis* L. (Tiliaceae) [GB (充蔚子)]

茺蔚子は本来 *Leonurus sibiricus* L. およびその近縁種 (Labiales) の果実をいうが、本生薬はそれらに一致しない。CMM には本生薬の記載があるが、種子を薬用にするという記載はみられない。この植物はせんいをとるため熱帯アジアに広く栽培されている。一方 *C. trilobularis* L. はインド系 3 文献において、せんいをとる植物であるばかりでなく、種子を薬用として使うという。IMP ではさらに 2 種類の種子も使う。以上のデータから、茺蔚子の基原植物がマラヤですりかえられたと思われる。なお京大薬学部生薬学教室の生薬標本の中に木村康一氏が上海で収集した洋麻という生薬名のものがあり、茺蔚子の一種として整理されている。

(69) S 423 耳聾草（全草）*Abutilon indicum* (L.) Sweet (Malvaceae) [常中草薬（耳响草, 牛响草, 磨盤草）, 台湾薬用植物誌（磨盤草, 耳聾草—嶺南—）, GIMP]

DEPMP によればインドおよびマラヤにおいて本植物の葉が使われ、シンガポールの華僑は“toh hoi chhau”という名で売っているという。

(70) S 412 帽子草（全草）*Abutilon avicennae* Gaertn. (Malvaceae) [台湾薬用植物誌（帽子盾）, IMP]

インド系 3 文献には同属近縁種がさらにいくつか利用されている。

(71) S 569 綿花仁（種子）*Gossypium herbaceum* L. (Malvaceae) [CMM, DEPI, IMP, GIMP]

インド系 3 文献では本植物の全用部が使われるが、CMM では種子だけが薬用として使われるという。

(72) S 183 芙蓉根 (根) *Hibiscus rosae-sinensis* L. (Malvaceae) [GB (川槿皮), 常中草薬 (扶桑), IMP, GIMP]

常中草薬では根のほかに花, 葉も使われるという。DEPMP でも本植物の根, 花, 葉をマラヤで使うという。インド系文献には同属近縁種のほぼ全用部が使われる。

(73) S 174 蒲黄頭 (根) *Hibiscus trionum* L. (Malvaceae) [GB (和尚頭)]

(74) S 237 木綿花 (花) *Gossampinus malabarica* (DC) Merr. (Bombacaceae) [常中草薬 (木綿), GB, CMM (*Bombax malabaricum* DC, 木綿花, DEPI, IMP, GIMP (*Salmalia malabarica* Schott et Endl.))]

各文献で使われている学名はすべて Synonym である。DEPMP によれば華僑は花を輸入して皮ふ病薬とするという。

(75) S 319 山竹壳 (果皮) *Garcinia mangostana* L. (Guttiferae) [GB (山竹果), IMP, GIMP, DEPMP]

DEPI では果皮は染料とする。DEPMP によればシンガポールから中国へ輸出するという。

(76) S 439 茶時癩, S 212 時茶癩 (全草) *Viola diffusa* Ging ? (Violaceae) [台湾薬用植物誌 (茶匙黄)]

CMM では *V. pinnata* L. 胡堇草, *V. sylvestris* Lam. 堇菜, GB では *Viola* sp. 集膝主, インド系 3 文献にも全草を利用するものがある。DEPMP によれば中国では *V. patrinii* DC を使い, マラヤの中薬薬行ではこれを輸入しているが, 多分 2~3 種混合しているであろう。

(77) S 240 石榴根 (花), S 574 石榴根 (根) *Punica granatum* L. (Punicaceae) [GB, DEPI, IMP] 和名ザクロ

DEPMP によればマラヤで根を下痢止めとして使うという。

(78) S 414 金石留 (全草) *Osbeckia clrinensis* L. (Melastomataceae) [常中草薬 (天香炉) 台湾薬用植物誌 (金石榴)] 和名ヒメノボタン

GIMP では同属異種植物が使われる。

(79) S 45 鴨脚皮 (皮) *Schefflera octophylla* (Lour.) Harms (Araliaceae) [常中草薬] 鴨脚木の樹皮と考えられる。

(80) S 13 烏不企 (茎・材) *Aralia decaisneana* Hance (→ *A. spinosa* L.) (Araliaceae) [常中草薬]

文献による用部は根であるが, 本生薬にはずいがある。しかし刺の痕があまりみられないので根に近い部分であろう。Chemical Screening Test は次の通り, アルカロイド (Meyer reagent) —, タンニン (FeCl_3 soln) —, トリテルペノイド又はステロイド (Lieberman-Burchard) + サポニン (起泡) +, このデータは先の *Zanthoxylum* 属標品および推定した生薬と *Aralia* 属標品の Chemical Screening Test の結果とよく一致する。

- (81) S 210 鹿含草 *Pyrola medica* Sw. (Pyrolaceae) [GB]

CMM では *P. medica* Sw. 鹿蹄草，現代実用中薬では *P. japonica* Sieb., 浙江中草手冊では *Pyrola* 属ならば種を問わず薬用可という記載がある。

- (82) 香排草（根）*Lysimachia foenum-graecum* Hance (Primulaceae) [GB（靈香草），中薬志（排草，零陵香）]

CMM では *L. sikokiana* Miz. 排草，排草香，靈香草，中薬志によれば浙江地区で *Ocimum basilicum* L. 罗勒 (Labiatae) を零陵香，排草という。

- (83) S 386 紫地丁（全草）*Gentiana Loureirii* Griesb. (→^{I.K.} *G. indica* Steud.) (Gentiana-ceae) [GB（地丁）]

薬材学の紫花地丁，地丁草は *Violaceae* の *Viola yedoensis* Makino, CMM でも *V. patrini* DC (= *Fumaria officinalis* L.), 現代実用中薬でも *V. chinensis* G. Don であるが，本生薬はこれに一致しない。一方インド系文献では3種の *Gentiana* 属が使われる。なお大阪日盛株式会社生薬輸入部の紫花地丁も *Viola* 属でなく *Gentiana* 属である。

- (84) S 587 鸡旦花（花）*Plumeria rubra* L. var. *acutifolia* (Poir) Bailey (Apocynaceae) [常中草薬（鸡蛋花）]

GB, DEPI, IMP では *P. acutifolia* Poir, GIMP では *P. rubra* L. を使うという。

- (85) S 610 甜老葉（全草）*Tylophora* sp. (Asclepiadaceae) [GB（甜老）]

IMP および GIMP に数種の *Tylophora* 属が記載されている。

- (86) S 167 武靴藤（茎・材）*Gymnema sylvestre* R. Br. ? (Asclepiadaceae) [IMP, GIMP, 図説熱帯植物集成]

文献の用部は葉および根である。GB の武靴行は基原不明生薬の一つである。

- (87) S 169 馬鞍藤（茎・材）*Ipomoea pes-caprae* Roth (→^{I.K.} *I. biloba* Forsk.) (Convolvulaceae) [常中草薬，台湾植物名集] 和名グンバイヒルガオ

インド系3文献に *Ipomoea* 属の茎を薬用とするものは上記のほか2～3種ある。

- (88) S 27 蘇梗（茎・材）*Perilla* sp. (Labiatae) [GB]

薬材学では *P. frutescens* Britton var. *crispa* (Thunb.) Benth. 和名シソを基原とするが，本邦栽培のシソと比較するとき，本生薬は茎が太く，木化の程度も強いので，異種と思われる。

- (89) S 242 益母花（花）*Leonurus sibiricus* L. (Labiatae) [江苏省植物药材誌]

本植物は全草および種子（茺蔚子という）を使うという文献が多いが，花を使うという記載は稀である。

- (90) S 395 緑茵陳（全草）*Origanum vulgare* L. (Labiatae) [GB, DEPI, IMP, GIMP]

- (91) S 404 半枝蓮（全草）*Scutellaria barbata* Don (→^{I.K.} *S. rioualis* Wall) (Labiatae)

[常中草薬]

(92) S 409 希焱草 (全草) *Anisomeles ovata* R. Br. (Labiatae) [嶺南采藥録 (稀焱草)]

薬材学の稀焱草は *Siegesbeckia orientale* L. var. *pubescens* Makino (Compositae) 和名メナモミ, CMM では *S. orientale* L. である。しかし本生薬はこれらに一致しないので, 第Ⅱ報において *Isodon* sp. (Labiatae) としておいたが, 今回文献により上記学名のものと推定されたので訂正する。IMP および GIMP では本植物のほかに *A. malabarica* Br. が記載されている。

(93) S 438 韓攸草 (全草) *Scutellaria indica* L. (Labiatae) [常中草薬 (韩信草), 嶺南采藥録] 和名タツナミソウ。

GB の韩信草は *Bonnaya reptans* Benth. (Scrophulariaceae) でこれは本生薬に一致しない。GIMP に *S. galericulata* L., DEPMP に *S. discolor* Colebr. が記載されている。

(94) S 598 血見愁 (全草) *Teucrium viscidum* Blume (Labiatae) [常中草薬 (血見愁, 山藿香, 皱面草, 方枝苦草), 嶺南采藥録]

薬材学では *Acalypha australis* L. (Euphorbiaceae) 和名エノキクサ, CMM では *Rubia cordifolia* L. (Rubiaceae) 和名アカネであるが, 本生薬はこれらに一致せず, 第Ⅱ報で Labiatae と推定しておいたものである。本邦のツルニガクサは本植物の変種となっている。GIMP では同属別種で薬用とされるものがある。

(95) S 468 白茄根 (根) *Solanum dulcamara* L. および *S. spp.* (Solanaceae) [GB (茄根)]

CMM では *S. melongena* 和名ナスを茄といい, 根, 茎, 葉, 果実を薬用とする。インド系3文献では根を薬用とする *Solanum* 属は数種記載されている。

(96) S 434 灯笼草, S 416 百子草 (全草) *Physalis angulata* L. (Solanaceae) [CMM (苦瓠), 台湾植物名彙] 和名センナリホオズキ

CMM では *P. alkekengi* L. と本植物を区別していない。常中草薬では灯笼草に *P. minima* L. をあてている。IMP では *P. minima*, GIMP では *P. alkekengi* および *P. angulata* L. が記載されている。

(97) S 10 神羽箭 (全草) *Buchnera cruciata* Buch.-Ham. (Scrophulariaceae) [GB, 実生薬 (神羽箭, 衛茅, 黒骨草)]

薬材学の鬼箭羽は *Euonymus alata* (Thunb.) Regel (Celastraceae) 別名衛茅の茎の羽状突起物である。実生薬に“草本, 即衛茅枝幹上之羽, 其頂上有花以箭羽故名, 根晒干变黒色”と記載されている。CMM の神箭, 鬼箭は *E. thunbergianus* Blume である。

(98) S 425, S 432 金牛草 (全草) *Veronica* sp. (Scrophulariaceae) [推定]

GB の金牛は *Ardisia* sp. (Myrsinaceae) で, 薬用部は根である。CMM の金牛草は *Kyllin-*
日本植物誌
gia monocephala Rottb. (→ *Cyperus brevifolia* Rottb.) (Cyperaceae) —税関リスト—
(1965)

および *Ardisia japonica* (Thunb.) Bl. 紫金牛—漢口リストーで、本生薬とは一致しない。
IMP および GIMP では 2～3 の *Veronica* 属の全草が薬用とされる。

(99) S 431 毛射香（全草）*Adenosma glutinosum* (L.) Druce (Scrophulariaceae) [GB, 常中草薬]

DEPMP によれば *A. caeruleum* R. Br. が呪術的用途、*A. capitatum* Benth. はインドネシアで薬用および betel chewing の材料として使うという。

(100) S 403 定経草（全草）*Lindernia* sp. (約3/2) (Scrophulariaceae) および *Hedyotis* sp. (約1/3) (Rubiaceae) の混合物〔台湾植物名彙〕

GB の定経草は韓信草と異名同物で *Bonnaya reptans* Benth. をあてているがこれを訂正する。台湾植物名彙の定経草には 3 種類の植物がある。すなわち (1) *L. anagalis* (Burm. f) var. *cerbenifolia* (Calsm.) Hara 和名スズメノトウガラシ, (2) *Hedyotis corymbosa* (L.) Lam. (= *Oldenlandia corymbosa* L.) および (3) *H. diffusa* Willd. (= *O. diffusa* Roxb.) 和名フタバムグラである。

(101) S 377 黒芝麻（種子）*Sesamum indicum* L. (Pedaliaceae) [CMM（胡麻）, DEPI, IMP, GIMP]

(102) S 428 九干菜（全草）*Dicliptera chinensis* Nees (Acanthaceae) [GB（九干菜）]

IMP, GIMP では *D. Roxburghiana* Nees を使うという。DEPMP によればマラヤの *Diliptera* 属は薬用にしないという記載がある。

(103) S 473 黄枝根（根）*Gardenia florida* L. (→^{I.K.} *G. jasminoides* Ellis) (Rubiaceae) [CMM（梔子根）, GIMP, DEPI]

GB の山梔根は *Gardenia* sp. で、これは中薬ではないが、インドで頭痛薬として使うという記載がある。CMM では梔子根は本草にはないが、商品として流通しているという。IMP には *C. turgida* Roxb. が記載されている。

(104) S 189 入骨丹（根）*Rubia* sp. (Rubiaceae) [GB（入骨丹）, GIMP]

CMM では *R. cordifolia* L. の根を菟といい、薬用および染料にするという。

(105) S 420 金剣草（全草）*Rubia cordifolia* L. (Rubiaceae) [CMM, (茜草), DEPI, IMP, GIMP]

(106) S 430 丹老草（全草）*Hedyotis cf. herbacea* L. (Rubiaceae) [GIMP]

(107) S 405 蛇舌草（全草）*Hedyotis diffusa* Willd. (Rubiaceae) [常中草薬, GIMP]
和名フタバムグラ

(108) S 623 珠子草（全草）*Hedyotis corymbosa* (L.) Lam. (Rubiaceae) [台湾植物名彙 (珠子草, 定経草), GIMP]

(106)～(108)の 3 品目は形状がよく似ており同属植物と推定されたので、まとめて述べる。

第Ⅱ報ではこれらに対し、*Oldenlandia* 属を使ったが、京都大学理学部植物標本と比較した結果、その *Synonym* である *Hedyotis* に改める。

GB では丹草に *Oldenlandia Heynii* G. Don をあててあるが、植物標本と比較した結果は *H. herbacea* に最も近い。GIMP には上記のほかに *O. auricularia* K. Schum. (= *H. auricularia* L.), *O. biflora* L. *O. heyneinei* Hook. f. および *O. umbellata* L. が記載されている。

(109) S 310 苦瓜干 (果実) *Momordica charantia* L. (Cucurbitaceae) [GB, CMM (苦瓜乾), DEPI, IMP, GIMP]

(110) S 159 防党 (飲片), S 579 防党参 (生) (根) *Codonopsis tangschon* Oliver (Campanulaceae) [GB, CMM]

インド系3文献では *C. ovata* Benth. が使われるという。

(111) S 406, S 407 有骨稍 (全草) *Bidens* sp.? (Compositae) [推定]

CMM では *B. parviflora* Willd. を鬼鍼草, 鬼釵, *B. tripartita* L. を狼把草, 郎罷という。GIMP および DEPMF では *B. pilosa* L. をマラヤで咳に使うという。

(112) S 440 鵝不食 (全草) *Centipeda minima* (L.) A. Br. et Aschers (Compositae) [常中草薬, GB (鵝不食), DEPI, GIMP, CMM (鵝不食草)]

GB, DEPI では *C. orbicularis* Lour., CMM では *Myriogyne minuta* Less であるが、これらは上記の *synonym* である。IMP の用部は種子である。

(113) S 214 地胆头 (葉) *Elephantopus scaber* L. (Compositae) [常中草薬, GB (地胆頭), DEPI, IMP, GIMP]

(114) S 211 香泽芝 (葉) *Eupatorium odoratum* L. (Compositae) [常中草薬 (香泽兰)]

CMM では沢蘭, 蘭草に *E. lindleyanum* DC ほか *E. spp.* GB では沢蘭に *E. japonicum* Thunb. あるいは *E. staechadosmus* (中国南部産), 天香芦を *C. sp.* とし, 広東から南方へ輸出している生薬はこれらの葉であると記載している。インド系3文献には同属異种植物が記載されているが, *E. odoratum* は魚毒として使われる。

(115) S 424 仏耳草 (全草) *Gnaphalium multiceps* Wall (→^{I.K.} *G. luteo-album* L.) (Compositae) [CMM, 現代実用中薬, DEPI, IMP, GIMP]

インド系3文献の用部は葉である。

(116) S 396 蒲公英 (全草) *Ixeris* sp. (Compositae) [推定]

薬材学では *Taraxacum mongolicum* Hansel-Maz. (Compositae), GB および GIMP は *T. officinalis* Wigg., IMP では *T. officinalis* の根を使うという。本生薬は茎を抱いた葉があるので *Taraxacum* 属に一致しないが, その類縁植物で, どこかで生薬がすりかわったものと思われる。

(117) S 484 九里明 (茎) *Senecio scandens* Buch.-Ham. (Compositae) [常中草薬, CMM]

GB は *Blumea chinensis* DC (= *Vernonia scandens* Ridl.) (Compositae) を九里明にあて
る。

(118) S 54 升麻（飲片），S 184 緑升麻（生）（根）*Serratula chinensis* S. Moore (Com-
positae)〔药材学（广东升麻），中药材品种论述上册〕

药材学では升麻に対し，通常 *Cimicifuga foetida* L. (Ranunculaceae) の根茎をあて，ほか
に同属近縁種が 5 種類記載されている。CMM では *Astilbe chinensis* Fr. et Sav. および *A.*
thunbergii Miq. (Saxifragaceae), *Thalictrum rubellum* Sieb. et Zucc. (Ranunculaceae) も升
麻という。

(119) S 31 蒼耳根（茎・材）*Xanthium strumarium* L. (Compositae)〔CMM, IMP,
GIMP, 嶺南采薬録〕

常中草药では *X. sibiricum* Patrin. である。

(120) S 234 茅花（花）*Imperata cylindrica* (L.) Beauv. var. *major* (Nees) Habb. (Gra-
mineae)〔常中草药，江苏省植物药材誌（白茅花），CMM〕

本植物の根茎を茅根といい，中药としてはよく知られているものであるが，花を薬用とする
という記載は稀である。

(121) S 309 浮小麦（果実）*Triticum aestivum* L. (I.K. → *T. vulgare* Vill) (Gramineae)
〔GB（浮小麦），CMM（小麦，浮麦），GIMP〕

(127) S 601 馬倫花（全草）*Cyperus pilosus* Vahl (Cyperaceae)〔推定〕

(123) S 247 檳榔花（果実）*Areca catechu* L. (Palmae)〔GB, DEPMP〕

(124) S 172, S 173 山棕子（根）*Trachycarpus excelsa* Wendl.? (Palmae)〔推定〕和名
シュロ

台湾植物名彙によれば *Arenga engleri* Bec. (Palmae) 和名クロツグを山棕という。

(125) S 93 千年健（根茎）*Homalomena sagittataefolia* Jungh.? (Araceae)〔中药志〕

药材学では基原不明，インド系 3 文献では *H. aromatica* Schott を使うという。

(126) S 397 番浮萍（全草）*Pistia stratiotes* L. (Araceae)〔GB（浮萍），嶺南采薬録（大
浮萍），IMP, GIMP〕

CMM では浮萍，水萍に *Lemna minor* をあてているが，Henry によるホンコンの Fou-
p'ing は *Pistia stratiotes* であるという。

(127) S 399 風葱乾（葉）*Allium fistulosum* L. (Liliaceae)〔CMM（葱）〕和名ネギ

(128) S 89 老薑皮（根茎）*Zingiber officinale* Roscoe (Zingiberaceae)〔CMM, GB（薑
皮）〕和名ショウガ

通常は本植物の肥大した根茎を使い，インド系 3 文献でも用部は根茎であるが，本生薬は根
茎の皮だけからなる。

(129) S 235 豆蔻花 (果実) *Alpinia globosa* Horaw. (= *Amomum globosum* Lour.) (Zingiberaceae) [CMM]

本生薬は花梗と未熟果からなるが、採集時には花がついていたと思われる。ショウガ科植物のうち本植物に近縁のものは根茎あるいは果実 (種子) を薬用とするものが多く、未熟果あるいは花を使うという文献は少ない。DEPMP によればマラヤで花を使うものが2~3みられる。

(130) S 605 溪石招 (全草) *Haemaria discolor* (Ker-Gawl) Lindl. (Orchidaceae) [常中草药 (石蚕, 石上藕)]

第II報で *Liparis* 属と推定しておいたが、ひとまず常中草药にしたがっておく。

次報では、本報での検討をもとにして、シンガポールの中薬群と、薬材学およびの中薬群との比較をさらに深めてみたいと考えている。

<謝 辞>

終りにのぞみ本研究資料の収集に際し、種々便宜をおはかりいただいた京都大学薬学部名誉教授上尾庄次郎先生、シンガポール大学 Dr. H. Keng、日本薬学会、大阪市日盛株式会社鄭岳氏ならびに呉健行氏、シンガポール益興貿易公司李懷德氏ならびに黄德祥薬行その他の方々に感謝いたします。あわせて出国に際し、御便宜をおはかりいただいた京都大学薬学部木島正夫教授ならびに宇野豊三薬学部長に感謝いたします。さらに本稿執筆にあたり、貴重な文献を貸与下された朝倉敏一博士、大阪税関多田一郎氏に、また基原植物解明に種々御助言をいただいた荻野謙治博士、神戸学院大学斎木保久教授に、さらに生薬の同定にあたって、京都大学理学部植物園ならびに標本室を利用させていただきました。あわせて深謝いたします。

<参 考 文 献>

- 南京药学院药材学教研组編：「药材学」(1961)
中国医学院药物研究所編：「中药志」Vol. I~IV (1960).
D. Hooper: The Gardens' Bulletin, (1929-30) Vol. VI pp. 1~165.
G. A. Stuart: Chinese Materia Medica, (1911).
F. P. Smith: Materia Medica and Natural History of China (1871).
直君立：実用生草薬典 (1949)
葉橋泉主編：現代実用中薬 (1953)
蕭步丹原著、莊兆祥増訂：嶺南采薬録，上，下 (1964)
「常用中草药手冊」(1970)
中国薬学会中薬研究委員会編輯：中薬鑑定参考資料，第I集 (1958)
浙江省卫生庁主編：浙江中薬手冊，第I集 (1959)
中国科学院植物研究所南京中山植物園薬用植物組編著：江苏省植物药材誌 (1959)
謝宗万編著：中薬材品种論述 (上冊) (1964)
中国科学院華南植物研究所編輯廣州植物誌 (1956)

- 張宏達等著：雷州半島の植被（植物生態学與地植物学資料叢刊，第17号）
謝阿才，楊再義編：台灣植物名彙（1969）
甘偉松編著：台灣藥用植物誌，第1～2卷（1970）
中藥通報（1958）**4**，151～2，（1959）**5**，90-91
金平亮三著：台灣樹木誌（1937）
木村，木島，丹：和漢藥名彙（1946）
北村，村田ほか：原色日本植物図鑑（草本編），上，中，下，（1957～64），（木本編）I（1971）
佐藤潤平著：漢藥の原植物（1959）
牧野：新日本植物図鑑（1961）
コーナー，渡辺：図説熱帯植物集成（1969）
I. H. Burkill and Mohamed Haniff: The Gardens' Bulletin, Vol. VI, pp. 165～321 (1929～30).
I. H. Burkill: A Dictionary of the Economic Products of Malay Peninsula Vol. I, II (1965)
B. M. Allen: Malayan Fruits (1967)
G. Watt: A Dictionary of the Economic Products of India Vol. I-VI (1885-1893)
K. R. Kirtikar and B. D. Basu: Indian Medicinal Plants (1918)
R. N. Chopra's: Indigenous Drugs of India (1932)
R. N. Chopra: Glossary of Indian Medicinal Plants (1956)
J. C. Willis: A Dictionary of the Flowering Plants and Ferns (1966)
J. D. Hooker and B. D. Jackson: Index Kewensis: Vol. I, II and Suppl. I-XIV (1893-1965)